

作事組だより

第127号(2024年5月発行)
一般社団法人 京町家作事組
〒604-8241
京都市中京区三条通新町西入釜座町32
Tel 075-252-0392 Fax 075-252-2392
E-mail: kyomachiya@sakujigumi.com
事務局開局時間: (月)9:30-12:30



(火・木・金)9:30-16:30(祝祭日を除く)

【町家の日 作事組イベント：F邸改修現場見学・職人トークセッション報告】

上京区にあるF邸施主様のご厚意で、「町家の日」のイベント期間にあわせて、作事組では3月9日(土)午前11時からと午後13時からの2回、改修現場見学会を開催させていただきました。

F邸の特徴は一番古い部分は明治期まで遡り、そこから昭和初期にまでに増改築を繰り返している点です。切妻平入平屋建て建築が最初の核となり、2階の増築、北棟の増築、玄関角屋の増築と大規模な改修が続き、今の姿となっています。本来の通り庭側の玄関の横に立派な式台玄関を持ち、北棟の新座敷は前庭と奥庭に縁側を配し、両面から緑が伺える郊外型邸宅の間取りとなっています。

この建物は長年の経年変化で南に大きく傾いているので、まずこのイガミ突きが重要な工事となります。当初はこのイガミ突き工事の様子を公開したかったのですが、タイミングが合わず、その工程についてはYouTubeで公開します。見学会ではもう少し工事が進んだ、内装工事前の状態を公開しました。

見学者は午前に12名、午後に13名と、どちらも定員を超えた参加がありました。参加者の皆様には、構造改修の工事の手順、建物の蟻害箇所、構造的特徴と改修履歴、内装工事当時の大工の細工について、また、この建物の構造改修で一番苦勞している、イガミ突き後の戻りについて説明を行いました。

傾いている建物の傾きを戻すには、通常は1階の柱の頭を突っ張り棒で押すか、逆方向からワイヤーで引っ張るかの方法を採用しますが、長年の癖が木に残っているため、力を抜くと元に戻ろうとする動きが多少なりともあります。F邸においてはその戻りの力が強く働きました。この原因は何かわからず悩みましたが、一つの仮説として考えられたのが、増改築を繰り返しているという点でした。変形した建物の上に増改築を繰り返していくと、以前の変形を残してしまい、それぞれの改修時期で水平垂直の基準が違うため、それぞれのエリアで元に戻ろうとする「バネ」のような効果が出てしまいます。この「バネ」が戻りの強さになっているため、一番古い部分に合わせたイガミ突きをするのではなく、各エリアの変形量も考慮した中間点での位置で戻り止めとしての新設の壁を入れるという方法を採用しました。

この中間点を探るにも圧力の数値化は現実問題として難しく、設計上の回答はできず、現場作業の中で手や耳で感じる現場サイドの大工の経験による感覚でその位置を決めたということも、作事組ならではの設計施工の連携の結果ではないかと感じます。広く一般の方に作事組の仕事を見てもらい、作事組の仕事ぶりを伝えられた良い機会となりました。

3月10日(日)午前9時~12時には、釜座町町家にて、作事組会員である京表具小野澤と中西畳商の代表のお二人と進行役の私で、トークセッションを開催しました。

京町家が減っていく中でより減少しているのが和室で、全国的に家の中からなくなってきました。畳も襖も当然一緒に減少していています。日常の生活から消えていくと、体験的に畳や襖もどうしたものなのか漠然としたイメージだけのものになってしまっています。今回は参加者に「表具」「畳」の歴史や、培ってきた技術のすばらしさを知ってもらい、「本物の良さ」を理解してもらおう機会にしたいと企画しました。

表具のお話では、まず何重にも和紙が貼り付けてある断面構造が分かる襖の模型を見せていただきながら、なぜそのような構造になっているのか、和紙の特性や湿度による膨張収縮を想定した貼り付け方とその作業工程、和紙の種類などの素材、断熱や音響効果の話を行いました。参加者の皆さんには素材や道具を回覧して、実際に手に取って見ていただきました。畳のお話では、畳の歴史、イグサの品質・産地から畳床、縁の話など多数のサンプルと共にお話いただきました。畳を好きになってもらうためには良い畳に触れてほしいと思います。マンションの一室にあるようなスタイロフォームを床にした畳は堅く寝転んでも全然気持ちよくありません。このような畳で育つ子供は将来畳を好むことはないと思います。藁床の畳で寝転ぶと、眠ってしまうくらい気持ちいいです。畳に触れる感覚で畳を知ってもらえれば、今後も和室を求められる風潮にならないかと思います。

襖も畳も本物を知って、欲しくなってもらえるのが、一番の和室の文化の良さを残していくことに繋がると思います。その先に町家のある街並みの保全になること願ったトークセッションでした。

(京町家作事組理事・設計担当 富家裕久)



【箱階段ベンガラ塗り体験@とうりん幼稚園 イベント報告】

令和6年1月27日の朝は、数日前から雪やみぞれが降っていたため心配していましたが、当日は天気にも恵まれました。年始に急遽募集をしたにもかかわらず、土曜日の朝から、大人8名、子ども4名、計12名の方々に集まっていただきました。

この日みんなで塗ることになった箱階段は、昨年取り壊されてしまった町家から救出した、使われなくなった箱階段と小箆箆です。作事組古道具市で京都市北区のとうりん幼稚園でご購入いただき、ペンキが塗られていた箱階段に洗いをかけて、イベントの前にあらかじめ白木地にしておきました。

最初は皆さんやや緊張気味でしたが、材料のベンガラや松煙・アマニ油、塗り方を説明しますと、各自ベンガラと刷毛を持って熱心に塗っていただきました。午後は、アマニ油を掛けて、ぼろ布で余分な油を拭き取り、完成させました。

今回の体験会でベンガラがとても安全で、簡単に、しかも安価で塗ることができると分かっていたかと思います。帰りには当日使ったベンガラと刷毛をお土産に持って帰っていただき、お家でも塗っていただけるようにしました。

みんなで一所懸命力を合わせてベンガラを塗った箱階段と小箆箆がきれいによみがえり、また幼稚園で使ってもらえるようになったことをみんなで喜びました。今回のベンガラ塗り体験のイベントは、とうりん幼稚園園長の大西建太郎先生のご厚意で開催することができました。大西園長に厚く感謝申し上げますとともに、とうりん幼稚園のますますのご発展を祈念いたします。

(京町家作事組監事・施工担当 小林良洋)



洗いをかける前の箱階段（下段）



洗いをかける前の小箆箆



箱階段に塗られたペンキを落としていきます



白木地状態になった箱階段



箱階段を分解しています



配合したベンガラを塗っていきます



箱階段と小箆箆に油を引き仕上げっていきます



ベンガラ塗りが完成した箱階段



油引きが完成した小箆箆

【シリーズ：新・町家構造事始 第1回】

作事組たよりの紙面をお借りして京町家の構造性能についての記事を書きたいと思ひます。2010年に「町家構造事始」というブックレットを発行しました。竹串とボール紙で作った模型(図1)を用いて、京町家が一つ石の上で自立するメカニクを考察したものです。それから13年、総論として巷での町家の構造性能評価はあまり進展のないままの印象です。しかし昨年、wallstatという木造建築物の倒壊シミュレーションソフトを紹介され、それを用いた京町家の構造性能評価のお手伝いが実現しました。コンピューターの中で構築された京町家が、想定される地震力を加えらるとどのように動くのか？またどれくらいの地震に耐えるのか？実際に京都に残るティピカルな1列3室型の町家についてある程度の検証ができました。

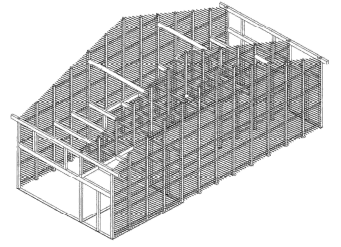


図1

年始には能登半島で大地震が起り多くの民家が倒壊しました。実際に町家改修の相談に出向くと、多くの依頼者が地震について不安を持っています。あたり前です。他の同業者に「町家は地震に弱い(そして建て替えるしかない)」と言われた。耐震診断を紹介してもらったら「桁行(間口)方向の壁が足りない(そして耐震補強が要る)」と言われた。概ね同じパターンです。「幕末に全部焼けたから、今の京町家は一度も大地震を経験していない」「京都の活断層は南北に走っている。だから東西に面する町家はより危険だ」。伝統木造の専門と言われる学識者の発言です。このような状況から、町家を残すための改修相談は始まりません。

一方で、昨今の京町家の「リノベ」は何でも有りの様相です。土壁をすべて落としてガラスを嵌めてみたり、外壁を全部モルタルで塗ってみたり、小黒柱や大黒柱を切ったり、鉄骨のフレームに置き換えたり、コンクリの箱を入れてみたり。商業利用やセカンドハウスでは地震の心配は少ないのかもしれませんが。町家全体の軸組やその保守管理を学ぶより、耐震要素が足し算の上で足りていれば良しとする設計者がいるのかもしれない。

今回の連載では、○町家の構造性能評価の今日に至る流れ○先に書いたブックレットのこと○wallstatそのものの紹介○その検証によって町家の構造性能で分かったこと○今後検証が必要なこと○昨今のいわゆる町家耐震補強工事の効用○町家の新築の取り組みと課題等について書いていきたいと思います。

この度の初回では、去年の検証で分かった要点だけお伝えしておきます。14年前に考察したとおり、京町家は立体的な三角柱のフレームに内在するバネで自立し、地震に備えます(図2)。その前提が成り立つ、側壁がすべて通し柱の大正期までの京町家(以降大正以前型と言ひます)は状態の健全化だけで阪神淡路(1995)での地震に十分以上に備えます。一方昭和初期型と呼ばれる総2階建て、横架材で柱が分断されている町家はそこまでの性能は備えません。吉田孝次郎先生が言う通り、京町家の美意識は最後に作られた昭和初期型の町家にまで引き継がれました。しかし完成されていた従前の構造は残念ながら伝わりませんでした。結果、町家の構造の性能を測るにはその町家が大正以前型か昭和初期型かの区分がまず必要になります。その診断も補強についても入口が異なることをお伝えします。

(京町家作事組設計担当 末川協)

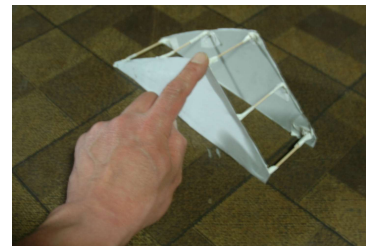


図2

【おもちつき&小薪割りイベント報告】

2023年12月9日土曜日のおもちつき&小薪割りのイベントでは、スタッフ12名に加え、90名の来場者があり、10時から17時までに25kgのもち米をすべてつききることができました。もち米は去年よりパワーアップして山形産のでわのもちを取り寄せ、味付けもきな粉、あんこ、納豆、大根おろし、いそべの5種類に増やしてご賞味いただきました。

来場された親子連れのお母様方から「こんなにすてきな町家で500円でいろいろ体験させてもらえるなんて〜」との声や「心の洗濯になります」とのありがたいお言葉を頂戴し、こちらも胸が熱くなりました。

今回も大盛況で無事に終えることができましたことを感謝申し上げます。開催側ながら、次回の開催もすでに楽しみです。

(京町家作事組事務局 阿部景子)



左、中：おもちつきの様子

1階ミセの間でおもちをつく体験をしてもらい、自分でついたおもちを好きな味付け・お替わり自由で、1階の茶室や2階の広間で召し上がっていただきました。

右：小薪割りの様子

今年は斧ではなく、より安全な小薪割りで手軽な薪割りを実施しました。主に、親子連れの皆様に木の香りが広がる中で、トントントン、パカッ！とリズムカルに楽しんでいただきました。

【作事組古道具市】

作事組では、残念ながら取り壊された町家から救出してきた建具や古道具などを安価にて販売させていただいております。インスタグラムに写真を載せていますが、新入荷のものをここでも紹介いたします。

もちろん取付・設置・建合せ・灰汁洗い・古色塗り等も行いますので、

【QRコード】

作事組Instagram



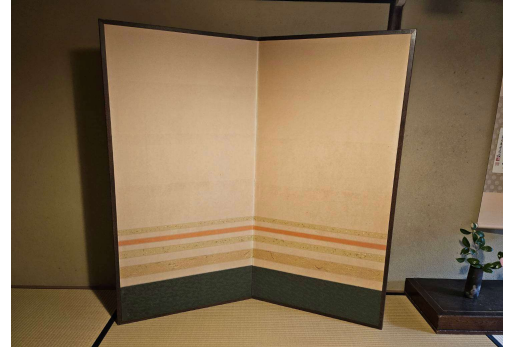
#14 天窓

寸法詳細については要問合せ



#15 ガラス建具 (二枚)

高さ1720x幅737



#16 屏風

高さ1530x幅1440



#17 天窓瓦

4枚×4枚(16枚物)の天窓



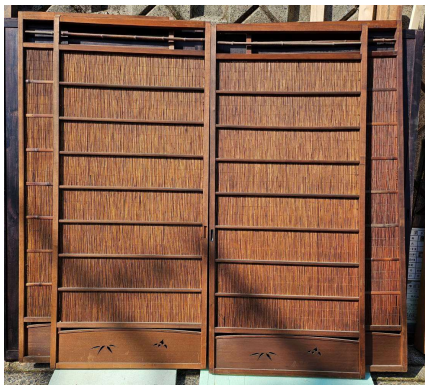
#18 ダイヤガラス窓(二枚建)

高さ1280×幅675



#19 大正ガラス窓(二枚建)

高さ963×幅941



#20 夏建具(四枚建)

高さ1726×幅734



#21 障子(四枚建)

高さ1765×幅731



#22 障子(四枚建)

高さ608×幅725

【新入社員紹介】



高田工務店

二級建築士、建築大工一級技能士

高田(タカタ)工務店の高田聡と申します。20年前に鑿(のみ)と鉋(かんな)の仕事に惹かれ大工の世界に入り、6年前に独立しました。作事組で開催していた棟梁塾の4期生でもあります。

健全な状態の京町家は、地震で倒壊しにくく、正しい方法でメンテナンスをすれば、耐久年数は100年200年にもなります。またその材料は、ほぼ石・木・土のみの自然素材が使用され、エコロジーの観点からも社会的評価が大変高い建築構造物だと言えます。

京町家は、サステナブルが謳われる現代において、守られるべき素晴らしい文化であり、これを保存していくことは建築大工の使命と考え、先人の技術、知識から学び、駆使し、日々取り組んでいます。